OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	青年期における「キャラ化」に対してパーソナリティが与える影響について
Author(s)	藤野, 遼平
Citation	大阪大学教育学年報. 2019, 24, p. 83-95
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/71377
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

青年期における「キャラ化」に対して パーソナリティが与える影響について

藤　野　遼　平[*1]

大阪大学[*1]

【要旨】

本研究では大学生を対象にキャラ化についての研究を行った。「キャラ化」とはコミュニケーションの場において，「キャラ」と呼ばれる，その人の特徴や個性に応じて割り振られた役割を振舞うことを意味する。本研究では，第一の目的として「キャラ化」を測定できる尺度を作成する。第二の目的として，先行研究により，「キャラ化」に特徴的なパーソナリティとされている「自己の多元性」「状況に応じた切替」「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求」「日常生活演技」の影響を調べる。

質問紙調査を行った結果，キャラ化には，キャラを他人から押し付けられる「キャラの受動性」とキャラを自分から押し出してコミュニケーションを取る「キャラの能動性」といった二つの側面が存在することが明らかになった。また，それぞれ「キャラの受動性」には「状況に応じた切替」の意識的自己切替，友人の選択切替，無意識的自己切替と「日常生活演技」の調和的演技，困難状況，実利，「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求」の拒否回避欲求が，「キャラの能動性」には「状況に応じた切替」の友人の選択切替，意識的自己切替と「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求」の賞賛獲得欲求，「日常生活演技」の調和的演技そして「自己の一元性」が影響を与えていることが明らかになった。

1. 問題

1-1　はじめに

現代の青年期の友人関係においては「キャラ」を用いたコミュニケーションが多用されている（土井，2009；瀬沼，2007）。キャラとは，キャラクターの略語であり，集団の中での個人の立ち位置や役割を表す言葉である。種類として，「天然キャラ：いつもボーッとしている人，間の抜けた人」，「いじられキャラ：からかいの対象となる人，遊ばれる人」，「インキャラ：陰気な人」などがある（山西，2013）。現代の若者においては，状況や属する集団での対人関係に応じて複数の「キャラ」を振舞い分けるとされている（土井，2009）。

「キャラ」に対しては近年，心理学からも研究がなされている。千島・村上（2015）は，「キャラ」の定義を「小集団内での個人に割り振られた役割や，関係依存的な仮の自分らしさ」と定義した上で，大学生は友人関係の中で「キャラ」があることに対して「理解のしやすさ」「コミュニケーションの円滑化」「存在感の獲得」という 3 つのメリットを認知していることを明らかにしている。つまり，「キャラ」を用いることによって，友人グループにおける個人の役割を明確にし，理解しやすく楽しい人間関係を築くことができるとしている。その一方で千島・村上（2015）では，「固定観念の形成」，「言動の制限」，「キャラへの囚われ」とい

うキャラのデメリットを大学生が認知していることも明らかになった。つまり，キャラがあることによって本来多様な側面がある個人の一側面のみが強調され，キャラに沿わない言動が制限されたり，自身のキャラに囚われるといった現象が生じうるとされている。

千島・村上（2015）によれば，友人からキャラを付けられている大学生は全体の5割程度存在するとしている。千島･村上（2016）では，中学生と大学生がどのように自身のキャラを受け止めるか，またそれによって心理的適応がどのように異なるかを明らかにしている。それによれば，中学生は友人から付与されたキャラを受容しにくく，キャラにあわせて振舞うことが心理的不適応と関連するが，大学生は付与されたキャラを消極的にでも受け容れることが居場所感の高さと関連していた。また，小川・佐々木（2018）は，個人がキャラを集団から付与された際にキャラと自己概念との間においてどのように葛藤を生じさせているのかを明らかにしている。

1-2 キャラを振舞う者のパーソナリティ特徴

しかしながら，以上の研究においてはキャラを自ら積極的に振舞う行動については焦点が当てられていない。キャラには「存在感の獲得」といったメリットがあり，自ら積極的に周りに自分のキャラを分かってもらおうと振舞うこともあるとされる（千島・村上，2016：瀬沼，2007）。また，今までの自分のキャラとは違うキャラを積極的に振舞おうとする「キャラ変」という言葉も生まれている。しかしながら千島・村上（2016）で作成された「キャラの受け止め方尺度」においてはキャラをどう受け止めるかにのみ焦点を当てており，積極的にキャラを振る舞うことには焦点が当てられていない。

また，キャラを振舞う者の個人的な特徴についてはいまだ明らかになっていない。上記の研究においては集団から付与されたキャラをどのように受け止めどのように個人の中に葛藤を生じさせているかということに焦点を当てているが，キャラを振舞う個人のパーソナリティにどのような特徴があるのかは明らかになっていない。よって，本研究ではキャラを能動的に利用する側面と受動的に受け入れている両側面の観点から，キャラを有している者がどのような個人的特徴を持つのかに焦点を当て，詳細な検討を行う。

本研究では，「キャラ化」を「特に若い人たちの間で行われる，「キャラ」と呼ばれる，人の特徴の一部に焦点を当てデフォルメし，わかりやすさと個性に応じて割り振られた役割に応じて振舞うコミュニケーション」と定義する。

「キャラ化」に影響を与えているとされる個人的パーソナリティとしては，先行研究から以下の三点の特徴を挙げることができる。

第一に，キャラは状況によって使い分けられるといった特徴を持つ（瀬沼，2007：土井，2009）。この点に対して，大谷（2007）は，現代青年の友人関係には，従来の深さ・広さとは独立した，状況に応じた自己や付き合う相手を切り替える傾向が存在することを示している。また，キャラを使用する個人は，自己が多元化しているといった特徴を持つ。つまり，状況に応じて異なったキャラを振舞い分け，そのどれもが自分らしいというように自己を並列させて多数保持しているとされている。この点に対し，浅野（2006）は，現代青年にとって自己は単一で一貫したものではなくなり，場面によって異なる「自分」を見せることへの規範的な制約や心理的な抵抗が薄れてきていることを指摘し，これを自己の多元化としている。勝家（2013）は自己の一元性が低いにもかかわらず，友人関係における自己の一致を示す群を多元的自己受容群と名付けている。そして，その特徴として，関わる相手によって無意識に自己を切り替えることで良好な友人関係を築いており，また異なる様々な自分をすべて本当の自分として受け入れているとし，価値観が多様化する現代において求められる姿であると推測している。

第二の特徴として，「キャラ化」する目的としての承認欲求の存在があげられる。承認欲求とは，他者に自分の存在を認めてもらいたい，もしくは自分の考え方を認めてもらいたいといった欲求のことである（中島他，1999）。瀬沼（2007）はキャラにおける承認欲求の存在をマズローの欲求段階説を援用して説明している。瀬沼によれば，「キャラ化」が発生するのは親しい友達グループとの間であるとし，友達集団に属した個人は所属と愛の欲求が満たされ，その次の段階の承認欲求を望むようになるとしている。菅原（1986）によれば承認欲求には，他者から称賛されたり好かれたりすることを求める賞賛されたい欲求と嘲笑されたり嫌われたくないといった拒否されたくない欲求の二つが存在する。瀬沼（2007）は，友人グループに所属していることが確認できた青年期の若者は，次に友人たちから自分の「キャラ」が認められることを求める欲求が発生するとしている。それとともに，友人たちに自分の「キャラ」を認めてもらえないことは友人グループ内で居場所がなくなるように感じるリスクがあるとしている。このことから，「キャラ化」をする青年期の若者は「キャラ」によって他者から好かれることを求める称賛されたい欲求の存在と同時に，「キャラ」を他人に認めてもらうことによって友人グループ内に居場所をつくろうとする拒否されたくない欲求の存在があると考えられる。

第三にキャラ化の程度に影響する要因として考えられるのが，演技性である。Goffman（1959 石黒訳 1974）は，人間は日常生活を送るうえで無意識に演技の切り替えを行っているとした。定廣･望月（2011）は，大学生の７割が日常的に演技を行っていると指摘しており，日常生活演技尺度を作成している。キャラ化は友人とのコミュニケーションの場のように日常的な場で行われる現象であるため，日常的な演技を測定する日常生活演技尺度（定廣・望月，2011）との関連を検討することが妥当であると考えられる。定廣・望月は演技の種類を相手に好印象を与えるような演技をする「好印象演技」と，相手に嫌われないよう行う「調和的演技」の２つに分けられるとした。また，演技をする動機には，相手との関係を悪化させたくないという「関係維持」，利益を得ようとしたり，嫌な事や不利益なことを早く終わらせようとする「実利」，相手に気に入られ新たな関係を作ろうとする「関係獲得」の３つがあるとした。さらに演技が生じる場面として，何らかの困難を演技によって打開しようとする「困難状況」と，誰か他者といることが演技の契機となっている「他者共存」の２つが存在するとした。

「キャラ化」と演技性に客観的な関連性があるかどうかは明確にはされておらず，瀬沼（2007）が行ったインタビュー調査によれば，キャラを演じている意識があるかどうかという質問に「演技をしている」と答えたのは58人中10人と少なかった。しかしながら，この調査は周りに友人がいる状況でなされたものであり，土井（2004）によれば演技には，それが垣間見えてしまうと白けてしまうといった傾向がある。そのため瀬沼（2007）は，「キャラ」で関係し合う友人と同席の場では質問に対し演技であると言えなかった，もしくは演技を見透かされないように演技をしていた可能性があるとし，何らかの演技性の存在があるとしている。

キャラ化は親しい関係の中だけで生じるコミュニケーション形態であるとされており，そのグループから疎外されることを避けるために自分と性格パーソナリティの違うキャラでも振舞ってしまうと言った側面が存在する。そのため，「キャラ化」の傾向が強い人は全体的に演技性が高く，その中でもキャラを他人から押し付けられていると感じている人は関係を壊さない為に調和的な演技をし，関係を維持するために，他者が身近にいる場面で演技を行うと考えられる一方，キャラを積極的に利用する人は，キャラによって相手に好印象を与えるよう演技をし，相手に気に入られて，関係を強化するために演技を行うと考えられる。

1-3　本研究の目的

本研究は以下の２点の目的から行う。

まず1つ目の目的として「キャラ化」を測定できるような客観的な尺度を作成する。「キャラ」には自らキャラを利用してコミュニケーションを取る側面と，他人にキャラを押し付けられて強制される側面の2つが存在する（土井，2009；斎藤，2014；瀬沼，2007）。しかしながら千島・村上（2016）で作成された「キャラの受け止め方尺度」では，キャラをどのように受け止めるかの側面にしか焦点を当てていない。よって，自身がキャラを持っているかどうか，持っているのであればそれは意識的に使用しているのか，それとも他人から押し付けられているのかといった「キャラ化」に対する意識を尋ねる尺度を作成する。

その上で尺度作成に当たっては，セルフ・モニタリング尺度（Snyder, 1974）との関連を調査することで，その妥当性を検討する。セルフ・モニタリングとは，自分の置かれた社会状況の性質を察知し，自己の表出行動や自己呈示を統制する社会心理学的過程のことである。岩淵・田中・中里（1982）では，セルフ・モニタリング尺度の下位尺度として，外向性・他者志向性・演技性の3因子が抽出されている。外向性は社会的な事柄への関心の高さや社会的な傾向を示す因子であり，他者志向性はある状況で適切な行動をとることの関心度の高さや自己の感情の統制力を示す因子であり，演技性を場に応じて様々な役割を演じる傾向で，他者を喜ばせたり，会話が流暢であるパーソナリティを示す因子としている。

キャラ化はグループの中で決められ，そのキャラから外れないように個人個人はキャラを振舞う（土井，2009；斎藤，2014）。また，キャラ化の現象として，そのグループの状況によってキャラを使い分けたり，演じたりするといった側面が見られることから（土井，2009；瀬沼，2007），キャラ化の程度が高い者は，それだけセルフ・モニタリングの傾向も高く，特にその中でも他者指向性が高いことが推測される。

2つめの目的として，先行研究で言われているような「自己の多元性」「状況に応じた切替」「承認欲求」「演技性」といったパーソナリティと「キャラ化」の関連について検討する。

「演技性」について，セルフ・モニタリング尺度にも演技性の下位項目が存在するが，Briggs, Check, & Buss（1980）はセルフ・モニタリング尺度の演技性は日常生活における行動ではなく，舞台の上における行動と関連していると指摘している。定廣・望月（2011）による調査においても日常生活演技を測定するそれぞれの因子とセルフ･モニタリング尺度の下位因子である演技性との間には有意な相関は見られなかった。

仮説として，自分のキャラを意識している傾向が強ければ，自己が多元的で状況による切り替えの傾向が強いと考えられる。次に，賞賛獲得欲求が強ければ，自己のキャラを能動的に振舞う傾向が強いと考えられ，逆に拒否回避欲求が強ければ，キャラを受動的に受け入れる傾向が強いと考えられる。最後に，キャラを受動的に受け入れている人は調和的で関係を維持するような演技を他人のいる所でし，キャラを積極的に振舞う人は相手に気に入られるために相手に好印象を与えるような演技をすると考えられる。以上の点が目的2の仮説として挙げられる。

2. 方法

2-1 項目選定

瀬沼（2007）斎藤（2014）土井（2009）を参考にして，能動的にキャラを使っているといった内容からなる質問項目を6項目，周りに言われたキャラを受け入れているといった内容からなる質問項目を6項目，キャラを使用していないといった内容からなる質問項目を4項目作成した。以上16項目から成る尺度をキャラ化測定尺度とした。

2-2 調査対象者

大学生454名に質問紙調査を行い，欠損値が３つ以上あったものを除いた432名（男性190名，女性242名，平均年齢19.90歳（SD=1.144））を対象に分析を行った。なお，分析対象者の欠損値は系列平均を用いて補完した。

2-3 調査時期

2015年11月２日から11月13日まで調査を実施した。

2-4 尺度

キャラ化測定尺度 項目選定に基づいて作成した16項目について「1.あてはまらない」から「5.非常にあてはまる」の５件法で回答を求めた。

セルフ・モニタリング尺度 岩淵・田中・中里（1982）により作成された尺度を用いた。この尺度は25項目から構成され，「1.全くそう思わない」から「5.非常にそう思う」の５件法で回答をもとめるものであり，外向性・他者指向性・演技性の３つの下位尺度からなる。

自己の一元性尺度 勝家（2012）により作成された「大学生の自己意識尺度」に含まれる下位尺度の１つである「自己の一元性尺度」を用いた。この尺度は７項目から構成され,「1.全くそう思わない」から「5.非常にそう思う」の５件法で回答を求めた。得点が低いほど，自己の多元性が高いことを意味する。

状況に応じた切替尺度 勝家（2012）により作成された尺度を用いた。この尺度は15項目から構成され,「1.全くそう思わない」から「5.非常にそう思う」の５件法で回答を求めるものであり，意識的な自己切替・無意識的な自己切替・友人の選択切替の３つの下位尺度からなる。

賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度 小島・太田・菅原（2003）によって作成された尺度を用いた。この尺度は18項目からなり,「1.全くそう思わない」から「5.非常にそう思う」の５件法で回答を求めるものであり，下位尺度として，賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の２つの下位尺度からなる。

日常生活演技尺度 定廣･望月（2011）により作成された尺度を用いた。この尺度は68項目から構成され，演技行動尺度（ACS）・演技動機尺度（ASS）・演技場面尺度（AMS）の３つの下位尺度からなり，さらに，演技行動尺度（ACS）の下位尺度として好印象演技・調和的演技，演技動機尺度（ASS）の下位尺度として関係維持・実利・関係獲得，演技場面尺度（AMS）の下位尺度として困難状況・他者共存が存在する。演技行動尺度（ACS）と演技動機尺度（ASS）では示された場面,示された演技行動を行う頻度について「1.全くしない」から「6.よくする」,演技場面尺度（AMS）では示された動機から演技をする頻度について「1.全くない」から「6.よくある」のいずれも６件法による評定を求めた。

2-5 調査手続き

質問紙は講義時間に配布し，提出先を指定して後日に回収した。なお,「キャラ化」という現象について説明する以下の教示文を提示した後，質問項目への回答を求めた。

「近年，若者の間で「キャラ化」といったコミュニケーション形態が生まれています。「キャラ化」とはコミュニケーションの場において,「キャラ」と呼ばれる，その人の特徴や個性に応じて割り振られた役割に応じて振舞うことを意味します。たとえばその具体例として，いつも遊ぶような親しい友人グループにおいて「いじられキャラ」や「ドジッ子キャラ」「毒舌キャラ」などの「キャラ」が人ごとに割り振られ，その役割に沿ってコミュニケーションを図ることが「キャラ化」の現象として見受けられます。そのような「キャ

ラ化」の長所として「毒舌キャラ」や「天然キャラ」として振舞うことによって，会話が楽しいものになり，コミュニケーションが円滑に進むといった点があげられる一方，そのキャラを演じ疲れたりするといったネガティブな側面も存在します。では，どのようなひとびとが「キャラ化」といった現象を生じさせているのでしょうか。わたしたちは，そのようなひとびとの特徴を明確化し，「キャラ化」を測定できる尺度を作成することを目的としています。そこで，このアンケートでは「キャラ化」と関連のあるとおもわれる特徴について伺います。次ページ以降の質問では，みなさんが普段，友人グループで交友している際に感じてらっしゃることについて質問いたします。「正答」や「誤答」が存在するわけではございませんので，本同意書の内容を読んだうえで，思った通りのことを回答してください」

3. 結果

3-1 キャラ化測定尺度の構造の確認

すべての項目ごとに平均と標準偏差を求め，各項目の得点分布の検討を行ったが，天井効果，フロアー効果はいずれの項目においても認められなかった。各尺度の記述統計量をTable1.に示した。

Table1. 各尺度の記述統計

			平均値	標準偏差	α係数
キャラ化測定尺度		キャラの受動性	2.65	0.81	.84
		キャラの能動性	2.88	0.55	.82
セルフ・モニタリング		外向性	2.94	0.55	.72
		他者指向性	3.32	0.47	.67
		演技性	2.60	0.83	.72
		自己の一元性	2.77	0.71	.80
状況に応じた切替尺度		意識的な自己切替	3.43	0.65	.75
		無意識的な自己切替	3.58	0.69	.82
		友人の選択切替	3.75	0.79	.79
賞賛獲得欲求・拒否回避欲求		賞賛獲得欲求	2.93	0.72	.86
		拒否回避欲求	3.41	0.71	.85
日常生活演技尺度	演技行動尺度	好印象演技	4.16	0.90	.87
		調和的演技	4.06	0.80	.85
	演技動機尺度	関係維持	4.53	0.81	.89
		実利	3.50	0.83	.82
		関係獲得	4.23	0.97	.89
	演技場面尺度	困難状況	3.90	0.73	.81
		他者共存	3.99	0.74	.84

次に，選定したキャラ化測定尺度の16項目に対して最尤法・Promax回転による因子分析を行った。固有値の変化は5.65，2.21，1.25，0.98，0.80，...というものであり，解釈可能性から２因子構造が妥当であると考えられた。そこで再度２因子に固定して最尤法・Promax回転による因子分析を行った。すべての項目について.40を基準として，因子負荷量が低いもの，複数の因子にまたがって高い負荷量を示す項目を除き，再度最尤法・Promax回転を行った結果，11項目となった。なお，回転前の累積寄与率は２因子で49.82％であった。

この結果をTable2.に示した。

Table2. キャラ化測定尺度の因子分析結果

質問	因子負荷量 F1	因子負荷量 F2
キャラの受動性		
14 友人が求めるキャラと本当の自分は違うと感じる。	.91	−.21
5 本来の自分と違うキャラを求められていると感じる。	.72	−.11
13 周りの友人が自分にキャラを押し付けていると感じる。	.71	−.06
15 自分の気持ちと裏腹にキャラを演じているときがある。	.65	.15
10 求められていると感じるキャラを演じていることがある。	.52	.29
6 その場の空気に合わせてキャラを演じさせられる時がある。	.51	.26
キャラの能動性		
4 自分のキャラを積極的に利用してコミュニケーションしている。	.02	.76
7 自分のキャラを押し出してコミュニケーションしている。	.08	.70
8 自分にキャラがあるとは思えない。	.15	−.70
1 自分のキャラを自覚している。	−.05	.70
2 自分のキャラを周囲に理解してもらおうとしている。	.02	.59
固有値	4.23	2.22
因子寄与率	33.62	16.20
因子間相関	—	0.36

各因子は以下のように解釈された。第１因子は「友人が求めるキャラと本当の自分は違うと感じる」といったようなキャラに従って振舞うことを強いられているような内容の項目が高い負荷量を示していた。そこで「キャラの受動性」と命名した。第２因子は「自分のキャラを積極的に利用してコミュニケーションしている」といったようなキャラを自覚して利用しているような内容の項目が高い負荷量を示していたので「キャラの能動性」と命名した。

内的整合性を検討するために各下位尺度の α 係数を算出したところ，「キャラの受動性」で α =.84，「キャラの能動性」で α =.82と十分な値が得られた。

3-2 キャラ化測定尺度とセルフ・モニタリング尺度の相関

キャラ化測定尺度の各因子とセルフ・モニタリング尺度の総得点および各下位尺度との尺度間相関を求めた。その際，キャラ化測定尺度の下位尺度間に中程度の相関が認められたため，一方の因子を制御変数とした偏相関分析を行った（Table3.）。

Table3. キャラ化測定尺度とセルフ・モニタリング尺度の偏相関

	セルフモニタリング	外向性	他者志向性	演技性	制御変数
キャラの受動性	.13**	−.07	.26***	.07	キャラの利用感
キャラの能動性	.35***	.34***	.26***	.38***	キャラの強制感

その結果,「キャラの能動性」はセルフ・モニタリング総得点およびすべての下位尺度で有意な正の相関が見られた。「キャラの受動性」においてはセルフ・モニタリング総得点および他者志向性において有意な正の相関が見られた。

3-3 性差の検討

キャラ化測定尺度の各下位尺度について，性別で群分けし，t検定を行った。その結果，いずれにおいても有意差は見られなかった。

また，男女ごとのキャラ化測定尺度の記述統計量をTable4.に示した。

Table4. 男女別のキャラ化測定尺度得点

	キャラの能動性	キャラの受動性
男性	2.67（0.84）	2.86（0.58）
女性	2.63（0.79）	2.88（0.54）

（ ）内は標準偏差を示す

3-4 キャラ化測定尺度に対するパーソナリティの影響の検討

キャラ化に影響を与えると考えられるパーソナリティがキャラ化に与える影響を検討するために，自己の一元性・意識的な自己切替・無意識的な自己切替・友人の選択切替・賞賛獲得欲求・拒否回避欲求・好印象演技・調和的演技・関係維持・実利・関係獲得・困難状況・他者共存を独立変数,「キャラの受動性」「キャラの能動性」を従属変数とした強制投入法による重回帰分析を行った。結果をTable5.に示す。

Table5. 各尺度を独立変数としたキャラ化測定尺度への重回帰分析

従属変数	R^2	投入された変数	β
キャラの受動性	.26	意識的自己切替	.24***
		調和的演技	.15*
		困難状況	.14*
		友人の選択切替	−.12*
		拒否回避欲求	.12*
		実利	.12*
		無意識的自己切替	.12*
キャラの能動性	.37	賞賛獲得欲求	.46***
		調和的演技	.23***
		友人の選択切替	−.18***
		意識的自己切替	.16**
		自己の一元性	.15***

***p<.001，**p<.01，*p<.05

その結果，意識的自己切替・調和的演技・困難状況・友人の選択切替・拒否回避欲求・実利・無意識的自己切替が「キャラの受動性」と，賞賛獲得欲求・調和的演技・友人の選択切替・意識的自己切替・自己の一元性が「キャラの能動性」と有意な関係が認められた。

4. 考察

4-1 キャラ化測定尺度の構造

結果より，キャラ化測定尺度の作成を試みて因子分析を行い，２つの因子が抽出された。各々を「キャラの受動性」「キャラの能動性」と命名し，２つの因子を下位尺度として内的整合性を調べたところ，十分に高い値を示した。また，セルフ・モニタリング尺度との関連では，仮説で想定していた他者指向性が両因子共に相関を示した。相関はやや弱いものの有意な値を示しており，本研究で作成したキャラ化測定尺度の併存的妥当性が確認されたと言えよう。

他人からキャラを押し付けられていると感じる「キャラの受動性」と自ら積極的にキャラを利用してゆく「キャラの能動性」の２つの因子の間にはr=.36の正の相関が見られた。瀬沼（2007）によれば，キャラを使用する若者には楽しさや笑いのために，気に入らなくても自分の「キャラ」を受け入れる姿勢が読み取れ，同時に多少の我慢はしても楽しさや笑いにこだわる姿勢があるという。一見背反する「キャラの受動性」と「キャラの能動性」との間に正の相関が見られるのはそのような理由からであると考えられる。

4-2 「キャラ化」に対するパーソナリティの影響

仮説として，１つめに，自己が多元的で，状況による切り替えの傾向が強ければ，自分のキャラを意識している傾向が強く，２つめに，賞賛獲得欲求が強ければ，自己のキャラを積極的に押し出す傾向が強く，拒否回避欲求が強ければ，キャラを他人から押し付けられている傾向が強い，そして３つめにキャラを受動的に受け入れている人は調和的で関係を維持するような演技を他人のいる所でし，キャラを積極的に振舞う人は相手に気に入られるために相手に好印象を与えるような演技をすると考えられるという３点が挙げられた。

重回帰分析の結果，「キャラの受動性」「キャラの能動性」ともに意識的自己切替が正の影響を，友人選択切替が負の影響を与えており，さらに「キャラの受動性」には無意識的自己切替が，「キャラの能動性」には自己の一元性が正の影響を与えて居る事が明らかになった。このことにより，キャラを振舞うことは意識的に自己を切り替えているという仮説は支持された。加えて，友人の選択切替が負の影響を与えていたことについて，瀬沼（2007）によれば，現代の若い世代の人間関係やコミュニケーションは無数のグループに分かれており，「キャラ化」はその親しい間柄のグループの中でグループメンバー間の差異を示すために生じるとしている。よって，コミュニケーションをとる友人を変更すると「キャラ化」自体も生じなくなるため，友人の選択切替が負の影響を与えていたのだと考えらえる。さらに「キャラの受動性」に無意識的自己切替が影響を与えていたことから，周りから望まれたキャラを振舞っている者は，そのように自分がキャラを振舞い分けていることに対してその時点では無自覚的であることが示唆された。また，「キャラ」を積極的に利用する人は自己が多元化しているといった先行研究の見解とは異なり，自己が一元化しているほどキャラを積極的に利用する傾向が高いことが示された。土井（2009）によれば，「キャラ」には自分自身の中のゆるぎない自己イメージとしての内キャラと，周囲の状況に適応する形で演技的にふるまう外キャラがあるとされている。キャラを積極的に振舞っている人物は，状況に応じて様々に異なる「場の空気」に対応するための外キャラを使用する一方，人生の拠り所となるような価値観や理想像の姿が不透明になってしまった現代社会において，その不安を無効化するために，決して相対化されることのない一元的な自己としての内キャラを持っているとしており，その結果が反映されたものだと考えられる。また，瀬沼（2007）によれば，若い世代には，友人から付与される「キャラ」を自分のものとして受け入れる一方で，親しい人間関係の中に演技性のない本当の自分らしさを求める傾向もあるとし，それによって，いろいろな「キャラ」を振舞いな

がらも自己のイメージは単一化されているといったような結果を示したのだと考えられる。

次に拒否回避欲求が「キャラの受動性」に，賞賛獲得欲求が「キャラの能動性」に正の影響を及ぼしていることが明らかになった。このことは，キャラを積極的に振舞う者は自身のキャラを押し出すことによって友人たちに自分のキャラを認めてもらい他者から好かれたいという傾向が強く，他者から押し付けられたキャラを受容する者はそれを拒絶することによってグループ内に居場所を無くすことを避けようとする傾向をもつという仮説を支持した。

最後に，調和的演技が「キャラの受動性」「キャラの能動性」共に正の影響を及ぼしており，さらに困難状況と実利が「キャラの受動性」に正の影響を及ぼしていることが明らかになった。「キャラの受動性」に対して，相手に合わせた行動を演技として振舞う調和的演技が影響を及ぼしていたことは仮説を支持した一方で，「キャラの能動性」にも調和的演技が影響を及ぼしていた。このことについて，調和的演技は周りの空気を壊さないように求められていると思われる演技を意味すると同時に，楽しそうに振舞ったり大げさにリアクションすることも含んでいる。キャラの特徴として，それを振舞うことによって笑いを生み出して承認を得ることが挙げられる（瀬沼，2007）。キャラを用いて楽しそうに振舞ったり大げさなリアクションをする演技が結果としてグループ内に笑いを生じさせるため，調和的演技がキャラを積極的に振舞うことに対して影響を及ぼしていたのではないかと考えられる。一方，好印象演技尺度は「優れた，できる人に見えるようにふるまう」といった項目からなり，自分を優れた人間であるかのように振舞う演技をするかが問われている。しかしながら「天然キャラ」や「いじられキャラ」のようなキャラであれば，自分があえて劣っているかのように振舞うこともある。よって，キャラを積極的に振舞うことに対して好印象演技の影響がなかったのではないかと考えられる。また，「キャラの受動性」に対して実利が影響を及ぼしていたことについては，実利尺度の項目には「お金など直接的な利益を得ることができるから」という項目以外に「仕事や，役割の上で，その演技が求められているから」「そこで演技することが社会のルールだと思うから」といった項目があり，いやいやでも相手が押し付けたキャラを振舞うことが，結果的には自分の利益になっていると思われるためキャラを振舞っているのだと考えられる。さらに困難状況も「キャラの受動性」に影響を及ぼしていたことについて，「相手の話に興味がないとき」や「相手と意見が違うとき」にキャラを振舞わなければならない理由として，現代の若者の「優しい関係（土井，2008）」が挙げられる。土井（2008）によれば，現代の若者は傷付けられることや対立することを恐れるあまり，周囲の友達との衝突を極端に避けようとする「優しい関係」にいるとされている。そのような「優しい関係」を守ろうとするあまり，自身に居心地の悪い状況でも押し付けられたキャラを振舞うことによって何とかやり過ごそうとしていることが示された結果であると考えられる。

4-3 まとめおよび今後の展望

本研究ではキャラ化測定尺度を作成し，先行研究で論じられているキャラ化に影響を与えているパーソナリティとの関連を検討した。キャラ化は近年，青年期の若者の間で多く行われていると考えられているが，キャラを振舞う若者の個人的パーソナリティに焦点を当てて行われた研究は少なく，本研究はキャラを振る舞う個人のパーソナリティに焦点を当てた心理学的研究の端緒となると考えられる。

その一方で研究２における重回帰分析の重決定係数の値が低いことから，キャラ化に対して他に重要な要因となっている因子があると思われ，その因子の特定をする余地も残されていると思われる。

また，本研究はキャラ化を「能動性」と「受動性」の２つに分類したが，千島･村上（2016）や小川･佐々木（2018）に示されるようにキャラの受け止め方は複数ある。同様に自身のキャラを押し出すようなキャラ

の積極的な振る舞いにも種類があると考えられる。今後の研究においては「能動性」「受動性」の下位分類も考慮した個人的パーソナリティの研究の余地が考えられる。

加えて，キャラには対人場面で振舞われるキャラである「外キャラ」と揺るぎない自己イメージとしての「内キャラ」の２つに分けられ，さらにFujino（2018）によれば，「外キャラ」「内キャラ」の違いにより，想定されうる不適応も異なってくることが示唆されている。本研究においては「外キャラ」「内キャラ」の違いを明確に分別しないまま調査を行ったが，「内キャラ」「外キャラ」に分けてその特徴をより精細に調査する必要があると考えられる。

付記

本研究は2015年度同志社大学心理学部卒業論文および日本青年心理学会第24回大会（2016年11月）にて口頭発表した内容に再分析を加えまとめたものです。

引用文献

相原博之　2007 『キャラ化するニッポン』講談社.

浅野智彦　2006 「若者の現在」浅野智彦編『検証・若者の変貌―失われた10年の後に―』勁草書房，233-260頁.

Briggs, S. R., Check, J. M., & Buss, A. H. (1980). An analysis of the self-monitoring scale. Journal of Personality and Social Psychology, 38, 679-686.

千島雄太・村上達也　2015 「現代青年における“キャラ”を介した友人関係の実態と友人関係満足感の関連―“キャラ”に対する考え方を中心に―」『青年心理学研究』26(2)，169-173頁.

千島雄太･村上達也　2016 「友人関係における“キャラ”の受け止め方と心理的適応―中学生と大学生の比較―」『教育心理学研究』64(1)，1-12頁.

土井隆義　2004 『「個性」を煽られる子どもたち―親密圏の変容を考える』岩波書店.

土井隆義　2008 『友だち地獄―「空気を読む」世代のサバイバル―』筑摩書房.

土井隆義　2009 『キャラ化する／される子どもたち―排除型社会における新たな人間像―』岩波書店.

藤野遼平　2016 「青年期における「キャラ化」に対してパーソナリティが与える影響について」同志社大学心理学部卒業論文（未公刊）

Fujino, R. 2018 “Relationship Between ‘Kyara’ and Self-Awareness: The Communicative Expression of Multiple Aspects of the Self in Japanese University Students” 2nd Regional Meeting of International Society for Adolescent Psychiatry and Psychology, Osaka, Japan, 2018年６月.

Goffman, E. 1959, 石黒　毅訳 『行為と演技』誠信書房　1974.

後藤順子　2010 「現代日本の若者のアイデンティティ再考―キャラ的コミュニケーションからみる自己概念のダイナミズム―」『Hyokyo Educational and Academic Resources for Teachers』Retrieved from http://repository.hyogo-u.ac.jp/dspace/handle/10132/3859（2015年12月16日）

岩淵千明・田中國夫・中里浩明　1982 「セルフ・モニタリング尺度に関する研究」『心理学研究』53，54-57頁.

勝家さち　2013 「現代大学生の自己意識と友人とのかかわり及びアイデンティティ形成に関する研究―青年の基本的信頼感に焦点を当てて―」『愛知教育大学学術情報リポジトリ』Retrieved from http://hdl.handle.net/10424/5511（2015年12月16日）

小島弥生・太田恵子・菅原健介　2003 「賞賛獲得欲求・拒否回避欲求尺度作成の試み」『性格心理学研究』11，86-98頁.

森　真一　2005 『日本はなぜ静いの多い国になったのか―「マナー神経症」の時代』中央公論新社.

小川将司・佐々木淳　2018 「大学生の“キャラ”と自己の在り方をめぐる葛藤過程」『心理臨床学研究』35(6)，573-583頁.

岡田　努　2012 「現代青年の友人関係に関する新たな尺度の作成―傷つけあうことを回避する傾向を中心として―」『金沢大学人間科学系研究紀要』４，19-34頁.

大谷宗啓　2007 「高校生・大学生の友人関係における状況に応じた切替―心理的ストレス反応との関連にも注目して―」『教育心理学研究』55，480-490頁.

定廣英典・望月　聡　2010 「日常生活における演技についての探索的研究」『筑波大学心理学研究』40，73-82頁.
定廣英典・望月　聡　2011 「演技パターンに影響を与える諸要因の検討―日常生活尺度の作成及び賞賛獲得欲求・拒否回避欲求との関連―」『パーソナリティ研究』20，84-97頁.
齋藤　環　2014 『キャラクター精神分析』筑摩書房.
瀬沼文彰　2007 『キャラ論』STUDIO CELLO.
菅原健介　1986 「賞賛されたい欲求と拒否されたくない欲求―公的自己意識の強い人に見られる２つの欲求について―」『心理学研究』57(3)，134-140.
鈴木　翔　2012 『教室内カースト』光文社.

Effects of the Formulation of *Kyara* on Personality during Adolescence

FUJINO Ryohei

ABSTRACT

Kyara indicates personal characteristics and personality. The formulation of *kyara* signifies behaving in a role that matches one's *kyara* in a shared communication space. In this study, we considered the effects of the formulation of *kyara* on university students. We first prepared a scale to measure the formulation of *kyara* and then examined the influences of multiple aspects of the self, situation changeovers, desire for approval, and acting, which are regarded as particularly prominent aspects of *kyara*. A total of 190 male and 242 female university students completed the questionnaires. Their responses indicated that the formulation of *kyara* could be divided into two types: passive *kyara* (which means *kyara* imposed by others) and active *kyara* (which means imposing *kyara* onto others). Passive *kyara* was influenced by conscious and unconscious situation changeovers, harmonious acting, accommodative acting, difficult situations, switching friends, motivation to avoid rejection, and benefit. Active *kyara*, on the other hand, was influenced by motivation for acquiring praise, switching friends, conscious situation changeovers, and the united self.